

《第三話》

長沢の七不思議

野上の里さとから谷川にそって日隠山ひかくれやまに登る長い沢を、里の人達は長沢と呼んで懐かしんで暮なつしてききました。

里の人々は、春は沢に入ってワラビや、ゼンマイや、シドケ、タラポなどの山の幸さちを食膳しょくぜんにのぜ、秋には紅葉もみじした沢深くわけ入いって栗くりを拾い、きのこを取り、冬は薪たきぎをとって生計たつきをたて、いきました。

長沢こそ里人さとびとにとって心のふるさとであり生活の場でもあったのです。

里の人達は、沢の入口葉山はやま嶽たけのふもとに小さな祠ほくらを建てて、男の子が生まれると刀を、女の子が生まれれば薙刀なみだたを奉納ほうなつしては、無事に強く育つようにと祈いのっていましたし、沢の行き帰かへりりには身が無事であるように、今日の幸が多いようにと祈いのりました。

谷川の石ころ道を七丁程ななちよう登のぼったところに、うっそうとはえ繁さかった樹木にかこまれた滝川たきがわが、二丈余の断崖だんげんから春夏しゅんか秋冬しゅうとう変かりない水しぶきをあげており、沢にわけ入いった人達の憩いどいの場となっていました。